

時 の 流 れ の 中 で

——足立寿美「カウント・ゼロ——原爆投下前夜」
(現代企画室刊)をよむ——

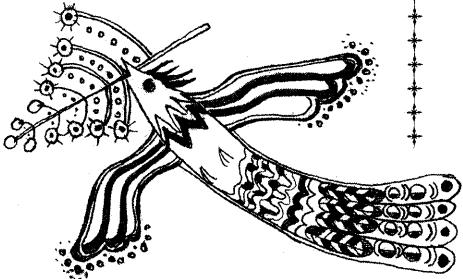
津 守 真

今年の夏、英國から帰つて間もなく、八月九日の長崎原爆記念日に、足立寿美さんからこの書物が送られてきた。

一九四五年四月十二日にルーズベルト大統領が急死し、準備がないままに責任ある地位を引きついだトルーマン大統領が、原爆投下の決定を下すまでの経緯を、人間的身辺からさぐろうとした書物である。

著者は、どこでも出かけていって、歴史の舞台で重要な役を担つた人たちと直接にインター・ヴューし、女性としての才能を駆使して、出来事の底にあつたことをひき出す。著者の足立寿美さんとは、その学生時代から、三十年以上にわたり、私は知り合ってきた。

著者は、広島女学院、お茶の水女子大学を卒業の後、米国に留学した。若くして亡くなつたご主人



は、米国の理論物理学者だった。著者が少女時代を過ごした広島の運命と原子爆弾、その最先端の理論と取り組んだ物理学者たちの人生、それとかかわる政治家の人生、それらは著者自身の三十年間の歴史と直接間接に織りまざっている。個人の歴史と世界の歴史とはどう重なり合うのか、著者のみでなく、この変動の時代を生きてきた人々の共通の疑問ではないだろうか。

もちろん、この書物が訴えることは、核の使用に対する警告である。「探究心という優れて純粋な欲望が産み出してしまった史上最強にして最悪の兵器＝原爆。本書は世界平和の構築という理想主義のもと、あの大規模な破壊と大量殺戮に至る決定が、あまりにも稚拙な思考回路のはたらきによって下されたことを明かす。」という文章は、本書の内容をよく示している。

この書物の舞台が動いていた時代は、一九四五年の八月である。私はこの同じ年の四月に大学に入学した。そのころの日記には、週二回の軍事教練に対する疑問が記してある。間もなく私は召集令状によつて軍隊にゆき、原爆投下の日には、房総半島南端で、伝令としてこの新型爆弾のメモを部隊に報告するために走つていた。それから後、世界の歴史が大きく転換する中で、私自身、子どもの仕事を専門として青年期から壮年期を過ごし、いま老年期に向かつている。

この書物のあとがきに、次のように記してある。

「東京の変貌は、年に一度帰国するかしない人間には激しいものである。有栖川公園の近辺も例外ではなく、……公園に面した一角に、現天皇誕生を記念して建てられた愛育病院があった。正面玄関をぐるっと回つて手前のドアを開ける。『あら、先生、どうぞ』出されたスリッパに足を入れながら、

一気に三十年に近い時間が戻り、目の前の顔を信じられない気持ちで眺め入った。……」

この著者が卒論を書いたのは、この養護学校の児童のクラスであったことを私は思い出した。著者にとって、ここでの保育の姿は、変形する時代の中で最も変わらないものなのであろう。たしかに、子どもと応答する保育の実際は、どの時代にも変わらないものがあるにちがいない、だが、社会の中でのこの子どもたちの位置、親の認識、将来への考え方など、この三十年間に局面が一回転したかのような変化がある。そしてあのころの子どもたちは、遙か以前に子ども時代を通りすぎて、大人になつている。

個人の歴史と社会の歴史とは重なり合いながら変化する。

* * *

この夏、私はロンドンでOME Pの世界大会と理事会に出席した後、障害児と障害者の学校と施設を訪問し、この分野の変化の実際にふれて衝撃を受けた。この国では一九九一年に、精薄者の施設は閉鎖される。障害者をコミュニティにもどす作業に、当事者たちは精力的に仕事をしているのを見て、私は、福祉の概念が革命的に変化しつつあることを感じた。

(愛育養護学校)